

教育は時代に先行せよ

鳴門
大学
院教育
教授大

山崎
勝之



時評とくしま

「インターネットに夢中になっていると感じますか?」――。キンバリー・ヤング博士作成によるインターネット依存テストの1項目である。「はい」と答える人はざぞ多いことだろう。

今やインターネットは、世界中の人々がこの情報網につながるほど普及した。日本の小学生でも45%ほどが利用している。ネット利用は、情報の送受・探索と通信に革新をもたらし、多様で新規な娯楽を提供するなど、その恩恵は計り知れない。この恩恵は地方の時代を力強く推進する可能性を秘めている。情報発信のコンテンツさえ磨けば、都心からの距離的分離は今後地方の弱みに

・インターネット依存テストの1項目である。「はい」と答える人はざぞ多いことだろう。

「インターネットに夢

はない。

この期待をもって、本

県の子どもたちのネット

利用率や携帯電話、スマ

ートフォン所有率は全国

平均並みというところ

か。文部科学省の調査結

果(2013年度)で、

は、教育用コンピュータ

ー1台あたりの児童生徒

数の少なさ、普通教室の

校内LAN整備率はトッ

プクラスだという。

しかし、この状況は手

放しでは喜べない。ネット

の普及は、同時に多く

の弊害を生み出す。近

年、子どものネット利用

で特筆すべき問題は、ま

た忍耐のインパクトがリア

ルいじめをしのぐ。

う。日本の中高生では、

ソーシャル・ネットワ

ー・キング・サービス(S

NS)では、この対応が

後手に回る。子どもへの

教育的配慮は最優先で、

問題を予見して対応策を

整備してからSNSを立

ち上げるべきだ。

こう叫んでも、商業ベ

ースに乗ったSNSは聞

く耳を持たない。依存必

要がダメージを受け抑制

機能や判断力が低下し、

睡眠習慣の崩壊が心身の

健康や対人関係を損ね、

不登校や学力低下を招く

ことが報告されている。

また「ネットいじめ」

も深刻な問題だ。リアル

いじめと比較し、加害者

や傍観者の特性の共通性

は高いが、加害行為の次

元が違う。バーチャルな

ネットいじめでは、その

元が違う。バーチャルな